



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	Building of "Nomadic Socialism": State and Society in the Making of Soviet Kyrgyzstan [an abstract of dissertation and a summary of dissertation review]
Author(s)	BEKTURSUNOV, Mir lan
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(学術)
Dissertation Number	甲第15211号
Issue Date	2022-09-26
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/87175
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/
Type	doctoral thesis
File Information	Mir lan_Bektursunov_abstract.pdf, 論文内容の要旨



学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（学術） 氏名： ベクトゥルスノフ ミルラン

学位論文題名

Building of “Nomadic Socialism”: State and Society in the Making of Soviet Kyrgyzstan
(「遊牧民的社会主義」の建設：ソヴィエト・クルグズスタンの形成における国家と社会)

・本論文の観点と方法

本論文は、国家としてのクルグズスタン（キルギス）の前身がソヴィエト連邦内の自治単位として成立した過程を、その前史を踏まえながら解明したうえで、1920～30年代の社会主義建設の特徴を、政治エリートと地方社会の両方のレベルで考察する。観点の特色としては、ソヴィエト国家とクルグズ社会の関係において、ソ連の介入主義的な国家としての性格と、遊牧に由来するクルグズ社会の性格が共に強力に作用したことに注目していること、またクルグズ史の枠組みに閉じこもらず、自治単位の形成過程での隣接諸民族のファクターを重視していることが挙げられる。方法は歴史学研究として正統的であり、クルグズスタンとロシアの計4つの文書館で発見した一次史料をもとに、英語、ロシア語、クルグズ語、日本語などの先行研究の成果と限界を踏まえて、オリジナルな歴史解釈を行おうとしている。

・本論文の内容

序論では、ソ連史およびソ連期中央アジア史研究の革新に重要な役割を果たしたいくつかの先行研究に触れながら、本研究の独自の主張として、ソヴィエト・クルグズスタンの形成と社会主義建設は、公式の国家政策とクルグズ人の既存の社会的実践の交わりとして理解できるという見方を提示する。そしてソヴィエト国家とクルグズ社会の相互適応の結果を表現するために「遊牧民的社会主義」というコンセプトを打ち出す。

第1章は前史に当たる部分ではあるが、ロシア帝国によるクルグズ人地域の併合と統治、およびクルグズ人側の動きを、地方統治規程や当時のクルグズ知識人の著作も読みながら掘り下げて論じている。ロシア帝国の進出に対しクルグズ人有力者たちが、コーカンド・ハン国との関係を重要なファクターとしながら、協力と抵抗の間を揺れ動いたこと、ロシア統治下でもマナプ（部族首領）たちが共同体での権力を握り続けたこと、帝政末期にはクルグズ人自らの歴史への関心が高まり、ナショナリズムの萌芽が見られたことが指摘されている。

第2章は、1917年のロシア帝国崩壊から1924年のカラ・クルグズ自治州（カラ・クルグズはクルグズに同じ）形成までの時期を扱う。ロシア革命・内戦期にクルグズ知識人らはカザフ人を中心とするアラシュ自治運動に参加したが、クルグズ人としての団結を呼びかける者もいた。ボリシェヴィキによるソヴィエト政権が確立した後もクルグズ人の存在がよく認知されない中で、1922年、トルキスタン自治共和国の中に山岳カラ・クルグズ州を設置しようという運動が現れた。これは、従来の研究では反カザフ人的な動きとされてきたが、実際はトルキスタン自治共和国のカザフ人指導者たちと連携していた。これが失敗した後も、クルグズ人とカザフ人はトルキスタンでの遊牧民の利益を守るために連携したが、ソ連中央の方針でトルキスタンを解体し民族別の共和国等を形成する作業が始まると、クルグズ人はカザフ人との違いを強調し、ロシア連邦共和国に直属する自治単位の形成を求めた。

第3章は、クルグズ自治州・自治共和国（1926年に昇格）の政治エリートに焦点を合わせ、クルグズ人幹部とロシア人らヨーロッパ系幹部の間、およびクルグズ人同士で繰り広げられた複雑な対立・協調関係と、モスクワからの調査・介入の動きを描く。ソ連の民族政策に対する民族エリートの不満は1920年代半ばにソ連各地でよく見られたこと、クルグズ人の「右派」は民族的利益を、「左派」は階級闘争を重視したが、両者の境界は曖昧で、イデオロギー的という以上に派閥

的な対立だったことを指摘している。モスクワは時によって支持するグループを変え、見せしめ裁判や追放などの強制的手段も用いながらコントロールを強めたが、人材不足などによる困難に直面し続けた。他方でクルグズ人エリートは、ボリシェヴィキの言葉遣いとルールを身に着けながら民族的な利益を主張し、モスクワ側との間で相互適応の過程が継続した。

第4章は、ソヴィエト国家が地方社会に浸透していく際に、現地に適応して自らが変質していった様子を描く。1925年に現地調査を行った民族学者によれば、クルグズ人社会に階級闘争はなく、富者と貧者は親族的な意識で結ばれていた。貧者から強い反発を受けることなく富者が力を持てる権力構造は、皮肉にも、ソヴィエト権力によってさらに強められた。ロシア帝国よりも地方への介入の度合いを強めたソヴィエト国家のもとで、出張してくる役人のもてなしや施設整備などの経費を捻出するために、現地有力者が一般人から資源を徴収する機会が増えたうえ、現地有力者やその子分が就く役職も増えたためである。特に郷・村ソヴィエトなどの選挙は氏族間の権力闘争の場となり、マナプたちが時に弾圧されながらも隠然たる力をふるった。自治共和国中央から派遣される役人も、地方の権力関係に巻き込まれたり、それを利用したりした。

第5章は1930年代の定住化政策を論じる。カザフスタンでの集団化・定住化に伴う大規模な飢饉は多くの研究者に注目されてきたが、クルグズスタンで餓死者は比較的少なかったものの家畜頭数は激減したことについては、研究が少ない。農業集団化は遊牧民の定住化を必要としていたが、ソ連中央が正式に定住化を命令したことはなく、定住化を進めるための財政的・人的資源の割当は少なかった。自治共和国の定住化委員会は高い数値目標を掲げたうえ超過達成したことにはしていたが、実態を伴っていなかった。また、ソ連中央は後進地域での集団化は慎重に行うとしながらも農業の増産を求めたため、クルグズ遊牧民は家畜とともに低地に集住させられたが、飼料は供給されなかったため、家畜は冬を越せなかった。クルグズ自治共和国人民委員会議と定住化委員会の議長だったユスブ・アブドラフマノフらは政策の不条理を理解していたが、地区レベルに責任を押し付けるしかなかった。結局、定住化は緩慢にしか進まなかった。

第6章は、集団化後の農場の実態を、地方の統計資料を用いながら描き出す。集団化は人々の自由意志によるという建前だったが、実際には上からの圧力が遍在し、多くの人々は集団化の意味をよく理解しないまま集団農場に加わった。トラクター、役畜、種子などが不足し、穀物の収量は少なかった。山岳地域では集団化率が特に高いことになっていたが、実態としては家畜の社会化（共有化）は名目的で、農場の運営は有力家系に握られ、定住地として指定された場所では水が不足したため人々は元の冬営地に住んでいた。1940年代末になるとソ連当局も、牧畜地域の経済発展のためには遊牧的な手法が必要であることを認識して、「放牧式畜産」として移牧を公認し、移動式の学校や医療施設などを建設した。社会主義が可動的・遊牧的になったのである。

結論では、クルグズスタンにおいてソヴィエト的・社会主義的原則と規範は現地人官僚・部族指導者・一般住民によって解釈・実行され、伝統的・遊牧的な慣習とソヴィエト的・定住的なものの境界は不明瞭だったと強調する。ヨーロッパ系の幹部たちもこの状況を追認するしかなく、ソヴィエト的形式はクルグズ的慣習に満たされた。国家にとって決定的に重要ではない政策については漸進的なアプローチが採られたのに対し、優先度の高い政策は非妥協的・強制的に実行されたが、強制的な手法は家畜激減などの危機を生み、結局は遊牧的なものとの妥協が図られた。